

【翻訳】

『ブラウニングと現代思想』

ダラス・ケンメアー著 野口忠男

序論

目次

序論

一・人間性の詩人

二・愛の詩人

三・芸術と自然の詩人

四・キリスト教の詩人

結論

注

現代思想の潮流が、異様ながらくたを浮かべうねりをなして流れている。傍観者にとってこの流れに逆らうことは難しいことであるし、批評家にとってはなおさらのことである。それに批評家の仕事は、この潮流に押し流されている多くの者を厳密に調べることにある。聖者が向かう問題と本質的に似ている問題に直面している創造的な批評家にとっても、思想と行動の流れから遠ざかり、その流れを十分意識していることはほとんど不可能に近いように思われる。そのように距離を置くことは、瞑想にふける人にとっても同じように、芸術家にとっても必要なことである。世の人々とその創造主である神は互いに抗争している。つまり世の人々は、神の愛が絶え間なく働き、彼らを救っているのに、神を追放しているのである。その為に、瞑想にふける者や芸術家は、世間の人々の声が聞こえず、真実なるものの声が聞こえるところに避難の場を設けるのである。しかしながら——ここには逆説が見られる——絶えず繰り返して世間の人々の中に入り出すことが非常に重要なことである。聖人は、自から世の人々のことを知るようになるまで、また悪の接近を許し、

滅ぼすものが一体何であるかが正しくわかるようになるまで、彼らに対して説教することはできない。芸術家も醜さに深く触れるまでは、彼にとって真実なものである美を顕現することはできない。この両者の均衡を保とうとすると、多くの者は耐えられなくなり、情緒の混乱を引き起こすことになる。疑念を懐いたり受け入れたりを全く同時に行いながら、この世界で生きていくことが、聖者や芸術家にとって重要な務めである。これには永久的な解決は見い出せないが、ある程度の妥協がなされなければならない。いかなる休息もないし、最終的に引き籠ることもあり得ない。内なる避難所へ引き籠った時でさえも、世の人々はおも戸口で叫び声を上げ、ある瞬間だけまれに静かになる。二つの均衡がうまい具合に釣り合うのは、人間の偉大さの程度によるものである。なぜなら、この世に住んでいる芸術家や聖人は、人間の心を知り、「悪魔に逆らうな」という命令の意味を悟り、神聖さを保持しており、ごくわずかに神の性質を分け持つようになっていくからである。そのために彼は冷静に、現代思想の激流をじっと見つめて、広く世に流布している動向を、子供の数々の試みを注意深く見つめる親のような辛抱強い目で注視し、それらのうちに時折貴重な発展の兆しを見つけているのである。それから彼は、攻略されることのない中心を、あらゆる活動をしている時にも見失わず、がらくたの中から宝物をえり分けるのである。魂のことを考えるのは少しばかり古いし、それについて何か述べることがかなり困惑させるものであると考える機械論的で、甚だ唯物的な時代にあつて、人間の魂を宿した最高の詩人が、軽視されるのは当然のことであり、現在ブラウニングが、無視され陰に押し

隠されたりしているのは確かである。なおブラウニングがワーズワスより低く評価され、蔑んでビクトリア朝文学者というレッテルをはられるのはおかしい話である。なぜなら、ワーズワスの作品は、ブラウニングの作品には決して見られないやり方で、彼の時代の影響を受けて潤色されたり、また時折ビクトリア朝風の感傷癖のためにだいたいにされたりしているのである。この本で、私はブラウニングの地位——かつては問題にされなかった——を再建し、彼が現代性と本質的に係わっていることを証すだけでなく、さらにいつまでも変わらぬ彼の作品の本質を強調しようとしている。いつまでも変わらぬ変化しないものがなければ、いかなる詩といえども、偉大な作品にはならないのである。これが一つの試金石であり、この試金石を全般に現代詩に当て嵌めた場合に、詩が不滅性の方向を指して進んでいけると言ういかなる主張もまったくくない。ほとんど現代詩人たちは、瞬間を生きることにについて誤解している。なぜなら、瞬間が永遠と関係しないならば、またこの世の中で、永遠への意識が絶えず保持されていないならば、瞬間が幸福や知恵への手がかりとならないことに気づいていないためである。さらに、ほとんどの現代の詩人たちは、この特別な一瞬をおもしろくない時の中に見い出し、大変おもしろくないことを強調することに関心を抱いているために、彼らには悪の中に何か可能性のある意味を探し求める暇がない。ここには前進の方向性がまったく示されていない。従つて、偉大なる詩のもう一つ別の特質であるこの予言的な一瞬が、常に欠落しているのである。

芸術の現代研究の質は、比類ないものであり、その起こりは容易

には理解し難いものであるが、大戦がこの発端にいつも起因しているのである。最も簡単な説明や一般化のように、この説明はまんざら信じられないことはない。この戦争それ自体は、人間の発展の上で回避できない必然的な一つの段階であつたし、私たちが今だに決して悟っていない教訓の一部であつたし、しかもこの芸術の新運動は、この戦争のもたらした変動の一部であるように思われる。あらゆる人生の動向に必然的に敏感な芸術は、新しい波動に即座に反応する。人間のいかなる反動をも一つの生起したことだけに帰すのは決して安全なことではない。精神の歩む過程は、それ程単純なものではない。世界史において、芸術はなおも幼児の段階にあり、二千年のキリスト教といえどもほんの一瞬のものである。私たちは人間の精神をとらえる様々な運動に対して、不当な程重きを置くことを避けられないように思えるし、たとえ不可能ではないとしても、近視眼的な視点でもって、これらすべての運動をただ一つだけ最終的に価値を有する大いなる完全体に結びつけることは難しいことがわかる。現段階の激変と嘔吐は、避け難い心理学上の曲解、つまり美や事実からの転換ではなく、確かに美や事実への転換であるかもしれない。幾人かの最も偉大な詩人たちの中に、私たちはこの傾向を彼らの発展のある段階において見るのである。全体的な問題は、この世界での芸術家の苦しい試練と地獄への下降とに結びついている。今、私たちは復活を待ち望んでいるのである。

前世紀の後半にも、物質主義の波が英国を吹きまわっていた。そしてキリスト教詩人として傑出したブラウニングが、別の偉大なキリスト教詩人、T・S・エリオットが今日活躍しているように、不

信の時代に活躍していたことは恐らく意味深いことである。ブラウニングの生存中、ダーウィンの意見に惑わされたこの思慮深い英国人は、神の实在について深く憂慮していた。二十世紀の二十年代において、このような不安はどれも幼稚なものとしてよく嘲笑されるものである。精神分析の研究の結果、ついに神に対する願望の真の意味が判明してきて、そのために超人とは、想像の父からいかなる靈的な支えもかりずに、独立できる人のことである以上、宗教的な信念は保守的なものと化しているのである。この現代思想の諸傾向のために、詩や人生の理解は、解き難く宗教と織り交ぜられて、ある特殊な位置をなしている。神を無視した人生、宗教を無視した詩は名辞矛盾なのである。そのために、今日、比較的ほとんどの人々が、詩とは何かとか、詩は何を語ろうとしているのかについて、はっきりとした考えを抱いていないことは驚くにあたらない。その結果、詩それ自体が痛手をこうむり、混乱のために口ごもっている。批評家が援助しようと努めると、大衆はますますいらいらしてくる。詩人自身が、永遠なる価値からかけ離れていくことに賛同する限り、この混乱は続くにちがいない。詩人ははっきり語る力を失っているのである。

地獄さながらの対立する信念の中に、宗教を思い起こす必要がある。誠意あるキリスト教信仰者（よく礼拝に出席するが熱意の足りない人とははっきり区別されるべきである）は、キリスト教だけが文明を救えると確信を抱いているために、苦難を受けることになる。そこで彼はキリスト教がいまだ公正な審理を受けていない理由を問うのである。この一般に広まっている混乱のために、文明化された

この世界が、まだ試みられたことのないただ一つの解決に無理やり向けられているのは確かにありうることである。共産主義が一つの道を示し、ファシズムが別の道を暗示している。両者ともまっしぐらに破壊に向かう道である。つまり、双方ともまったく反対の道をたどりながら、同じく行き詰まってしまふのである。人格の壊滅である。人格の保護と拡大にきわめて深く関与しているキリスト教だけが、一つの解決を提示してくれる。建物を建てるにあたり、安全な基礎は他には絶対に存在しないが、あらゆる他の方法が、当然はじめに試みられるべきである。真理は常に最初にやって来るのではなく、最後に訪れて来るのである。精神分析学は、自己認識の最初の第一歩として、はなはだ貴重なものであるが、キリスト教が始まるちょうどその時点でびたりと終了する。分析の最終的に到り着くところは、自己卑下である。つまり人間の最も気高い向上心も、幼児期の病的な執着の変形以外の何ものでもないし、それに人格に深く根ざした欠陥を補償するための大いなる努力と化してしまふのである。ついには、賢明な被験者は、自らの内なる生命を失い、なおそれを救済するいかなる方法も見つからないのである。彼は、裸むき出しの恥かしい姿をして、最後のあばきの前に立つことになる。彼の愛、理想、最も貴い望みも、絶えず賢く注目を引こうとする甘やかされた幼児のすすり泣きに帰せられてしまふのである。逆の言い方をすれば、キリスト教は、人間の弱さと愚かしさを十分に認めているが、それでもなお、人間が大いなる進歩をとげることが公言している。この宗教は、自己発展に関する唯一のすばらしい信仰である。しかしながら、現代の人々は、心理分析の方を取り、自

己発展の評価をあまりにも低く見積っているので、当然もがき不服をもらさないではいられなくなる。ここには人間を歯車の推進力そのものであるとするよりもむしろ、歯車の歯たることを好むように駆り立てている根本的に無知なところが見られる。キリスト教は一人一人の個人に価値を置く——「あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。……あなたの方の頭の毛までも、みな数えられている。」——共産主義とファシズムは、人間を社会や国家の機械の中の歯車として見ることにだけ価値を認めている。神に仕えることが唯一の奉仕であるが、なお人間は奴隷の境遇になり下がることに同意している。まことに社会体制は悪く、確かにそれをくつがえす必要がある。キリスト教徒は、私たちが神の国から遠く離れているけれども、無血革命によってこの世界が救われることに同意して決して成功していない。最初のキリスト教徒たちは、すべての物を共有し、共同して生活し、隣人を自分と同様に愛する命令に従っており、社会を救済する唯一の道を理解していた。キリスト教の理想が実際に実践されているところでは、成功が見られる。あちこちで、会社がキリスト教主義に立って運営されている。これと同じ理想が、国家や国際間に適用されたなら、英国やヨーロッパや全世界は、今だに知られていないほどの繁栄と平和の時代に移行するであろう。繁栄は必然的に平和に引き続き起こるものであり、進歩はただ恐怖不信、協力の欠除によって阻止されるものである。社会主義の他のいかなる形態も必要ではない。だが全体として現代の詩人たちは、共産主義の理想の方をとるか、異教精神のある形態の方を選ぶかの

どちらかである。宗教の指導者たちでさえ、自らの確信を伝える最高の方法に自信がもてないでいるように思える。彼らは、妥協を望む傾向が見られる、つまり、キリスト教を現代人の心に受け入れやすくするために、科学や経済学に容易にあてはまる類のキリスト教研究を示唆するほうが一層好ましいと考えている。シェイクスピアの作品にうわべだけの親近さでかかわることは、まことに悲劇的なことである。このことは、子供や生徒たちに対する不十分な教育のためであり、さらに深く学ぶことは不必要であるとする考えを押し進めているのである。数少ない原文あるいはシェイクスピアの二、三の詩からの流暢な引用——両方とも常に間違つて引用されている——は、好ましいと思われる全ての知識を網羅している。そして宗教は、いつも無教育な者が対話するのに最適な唯一の主題となっている。なぜなら、宗教は子供時代に教えられているために、それは簡単なものであるに違いないと受け止められているからである。事実、最近ある知的な労働者が、私に「聖書研究には、頭脳は必要ありません」と危険な半面だけしか真理を含まない言葉を述べた。

今日、すべての主題への新しい研究とキリスト教の原理を、長らく自からをキリスト教的であると考えている世界に、実際に適用することが緊急に必要となつてきている。そして真実の建設者である詩人は、予言者と同様に、ただ一つの恒久的な基礎から建設するために、最初の救済者のうちに数えられるのである。

第一章 人間性の詩人

芸術において、現代思想が求めているものを区分すれば、主に三種類になるように思える。

- (1) 写実主義
- (2) 醜くさ
- (3) 不明確さ

最初のものには、つまらないこと、一時的なこと、それに時事的なものに夢中になることが含まれる。ここには、かつては欠くことのできないものと考えられていた人生のほかの面は、想像力の中にだけあるもので、そのために、真実とみなされないと言う意味あいがある。多くの現実主義者たちは、キーツのいわゆる「想像力の真実」の正当性を否定しているように思われる。彼らはおそらく人間精神の最も有益な価値高い働きである想像力を、空想力として知られている精神の気晴しと混同している。しかし、想像力は現すが、空想力は隠す。想像力は、真実と関係し、空想はしばしば虚偽と関係する。それから実際に写実主義は、事実と真つ向から対立している。これらの親しみ深い用語を明確に定義することは、ほとんど誰とも意見が一致しそうな問題もなく深く理解する上で、有益な開始であるかも知れない。

現実主義者の見解によると、日常生活の重要でないできごと、起床——または、就寝——入浴、着物を着ること、食べることなどのような親密で個人的なできごとまでが、深い意味を持ち、なおも、いろいろな家事、たとえばベットを整えること、洗たく物をほすこ

と、アイロンをかけることなどが意味を持つ。なおも郊外の列車内でのおしゃべりを正確に詳しく記録することが重要である。絵画では、この傾向は親しみのもてる作品となって現れており、幸にも、年々立美術館での展示の数は減じて来ている。これらの作品には、汗をかきながらアイロン台に前かがみになっている女性、ピリヤードをしているワイシャツ姿の赤ら顔の男たち、洗たく物を裏庭にほしている血色のいい女性たち、薄汚れた駅で旅行の列車を待ちわび怒っていららしている母親と子供たちが描かれてある。これらのことは、確かに人生のさまざまな局面ではあるが、それらに宇宙的意味を与えることは難しいことである。これは写実主義ではなくて、いわゆる「実際主義」である。平凡さは、必ずしもそれ自体において、隠された諸価値で充満している必要はない。現代芸術を将来評価するに当って、この時代は、平凡さがほめそやされ、意義深いことが見落とされ、実際主義の時代として分類されるかも知れない。このことは、ヴィクトリア朝人特有の感傷癖と華やかな美しさへの極端な反動として説明されるであろう。反動は極めて必要なものであったけれども、均衡が保たれていないために、現実主義は、感傷的な人が写実主義からかけ離れて揺れるように、実在からかけ離れて動揺しているのである。偉大な芸術家は、ある局面にのみ関係しているのではなく、人生の全体に関与している。つまらないことを全く無視するのと同じように、それにだけ重点を置くのは誤りである。

このことは同様に、広く流布している醜さについての追及にも当てはまる。醜さがいわゆる「真実」であり、美は幻想なのである。

多くの現代詩人たちは、彼らの著作中に、美や空想の世界をほんの少しでも暗示するのを故意に避けるのである。そのことは、あたかも真実の極致への脅威であるかのようなものである。しかし、醜さと美しさの二つは、人生の両面である。春の木々の中で揺れている光線は、がらくたのごみ捨て場で食物をあさり、あちこちかき回している飢えた犬と同じほど真実なものである。全体として、現代詩人たちは、若葉の間で揺れ動く光や陰よりもむしろ、犬の骨だらけの骨格ややせかけた皮に特に関連させて、犬やごみ捨て場の方を選ぶのである。人は誰もこの理由を説明できない。満足のいく説明は、今だかつてなされていない。飢えた犬とごみ捨て場が存在していて、ところが一方で、春の光線と木々が存在しないということは、立証されえないことである。二十世紀は、醜さの時代であると主張されるのなら、同じような真実さで、外的な自然美は変わらず存在するし、しかもいかに状況が変わったとしても、人間の心には、急激な変化は決して起るはずがないと主張できるのである。さまざまな調整がなされる必要はあるが、潮流のような人間の激しい感情は、危ういほどに流れてる、そのためにロマン主義的な衝動への内なる反応が、エリザベス時代におけるのと同様に、速度をまし押えられなくなっている。そして、魂は完全さへの渴望をやめてしまっていないのである。この意味を観察し記すのが詩人の仕事である。仮に詩人がこれに失敗したら、彼は偉大さへのいかなる主張も放棄すべきである。それゆえに、彼は人生を描くに当って、美の事実を含むことになるだろう。

不明確さについて、現代人が発見した真実は、過去シェイクスピア

ア、ミルトン、シェリー——ブラウニングその人でさえも——によって表現されたものより、伝達するのが困難であると想像できるであろうか。多くの作家たちと同じように、これらの詩人たちは、確かに彼らの知覚したものを具体的に表現する言葉の不十分さに気づいていた。しかし、彼らは最終的に、比較的首尾よく障害を乗り越え、最も簡単な言葉で、最も深遠な真実のあるものを表現したし、シェイクスピアの場合は、それがとても単純であったので、多くの言葉が、いわゆる「家庭の言葉」になっている。多くの現代詩人たちの意味ある詩句には、三、四百年の歳月が経過した後、困難なことの意味を明らかにしたり、議論の主眼点を与えたりするのに、引用されることはほとんど望めないように思える。

しかしながら、数えあげたこれらの三つの要因、つまり写実主義、醜さと不確かさについて、ブラウニングを大家とするのは難しいことではない。事実前世紀の文学批評、また確かに一般読者の意見では、まさにこれらの罪のために、それには理由がないわけではないけれども、彼の作品は非難されたのである。賢明に考えたなら、この非難を差し控えることになる。彼は最高の写実主義者であった。彼の著作には、時々醜いところがあったし、確かに時折不明確なところも見られた。

ブラウニングは人間の生活に関する偉大な詩人であった。人間性について研究することは、彼にとって激しい感情であった。時々、激しい感情は、度を越すこともあったけれども、度を越さないようでは、非凡な創造的才能は決して生まれないのである。この偉大な人間には、結局次のことがわかっているのである。つまり自からの

横溢、時々不釣り合いなものとして嘲笑される感情的な反応も、また目のくらむような光明や底の知れない絶望をも心配する理由はないということである。ふさわしい釣り合いが達成されるまでには、年月がかかるかもしれないのである。たいていの場合、「風変わり」などところのある子供たちは、厳しくしつけられたり笑われたりするることによって、強く押えつけられている、また彼らの危険な行動は、嘲笑されることや自から自制しなければならないことが教えられる。天才は、最終的に押えつけられることはない。遅かれ早かれ、彼は、あらゆる種類の拘束に、打ち勝つのである。彼の人格の成長に関する初期の環境や妨げとなる影響がたとえどんなものであったとしてもである。彼は、常に人の助けがなくとも、疑念を持つように、または恐怖を懐くように教えられた行動を、尊重し、実践し活用することを知っている。ブラウニングは子供のころ、幸福であり自由であった。しかし彼は、いろいろな点において、原則からはずれていたのであった。ほとんどの詩人たちの初期の生活は、かくれもなく不幸であり、困難な環境に取り巻かれているのである。

主として心理学の原理について、表面的な知識だけではないために、人間の経験に関し、相当思想の混乱が生じている。すべての人は同じ経験を有し、そのために経験への「不釣り合いな」反応は、抑圧され打ち負かされるべきであるとき々断言されている。これは、質や深さや強さが異なることによって、人格の様々な型が起こりうる限らない反応の変化をまったく誤解していることに起因している。ミドルトン・マリー氏は、『来たるべき事態』の新版への序文で、このことに反対している。経験への人間の反応は、人間の顔と同じ

ように、変化に富んでいるものであり、二つとして同じものはありえないのである。次のように簡単に仮定してみよう。これはまるでいろいろな個人に、音楽の主題が与えられ、それは簡単な旋律で二、三の音符だけからなり、各自が自分流に作曲するのに似ている。ある人は童謡の旋律を、ある人はソナタの旋律を作る能力しかないけれども、天才は、主題にふさわしい苦しみと喜びをつけ加えて、交響曲を創作するように努めないではいられないのである。主題すなわち誕生、愛、死は、全ての人間の生活に共通するものである。各個人が主題から何を創造しなければならぬかを決めるのは、各自に残された問題である。それ故に、ブラウニングが、通りを行くあらゆる人々の顔に、G・K・チェスタトンが述べるように、「神性な顔」を見出しただとしても、私たちはこのことを途方もないこととして非難することはできない。なぜなら、偉大さがある程度持ち合わせている人々は、他の人も全て偉大であると考えるところがある。彼らの強烈な想像力は、実際に在るよりも創造するからである。しかしこのことは非難される程の誤りではない。ここには神性の要素がみられる。そのために、時々危険に、またまちがいに幻滅感に到るかもしれないし、理解できない人々にとっては、困惑となり、最終的に憤激を起こす原因となるかもしれないが、非難は決してできないのである。問題の所在は、天才の反応は、日常生活の貧弱な型に押し込められないと言ふことである。恐らく彼の人事に見られる価値は、「ピバは通る」のあのピバの偉業に似たものである。気付かれずにある神聖な使者は、通り過ぎていき、通過していく時に触れた人々は、二度ともとのままではいらなくなる。この詩人は、

あまりにも急いでヘレンにソネットを書いた時、彼女は実際にはただのネリイであり、手袋の贈物で一層喜ぶと言ふ、ウィリアム・シャーブの皮肉めいた批評には、痛烈な真実が見られる。

ブラウニングが、シェイクスピアに次いで、人生の偉大な詩人であったという事実からして、彼の作品には、写実主義、醜さと不明確さがみられるのがわかる。なぜなら、人生にはこれら全てが含まれているからである。すなわち深海もあれば浅瀬もあり、時々、人生は見るも恐しく、残酷で露骨であり、確かにぼんやりとしていて、あいまいで混乱し謎のように解きたいのである。ブラウニングは、冷酷な写実主義者である。彼は、感傷的になることもなかったし、またうまく偽って事実を包み隠す必要もなかった。例をあげてみると、純然たる憎しみの詩である「スペイン修道院からの独白」と「実験室」、または「フラ・リポ・リップ」、これは心理学的にみて申し分のない詩であり、性の抑圧の危険を立証するために、心理学者によって引用されるものである。又はポンピリアの愛人、これは異常に関しての奇妙な形を歌った別の心理学的な詩である。ブラウニングは、健全で純粋な心の持ち主であったので、「人生の事実」(あたかも男女の外には重要な事実がないかのよう)と呼ばれているものを包み隠す必要はなかった。彼は完全にヴィクトリア朝人の「上品さ」を免れ、深遠な宗教的人間であったので、真実のいかなる面も恐れなかったし、悪や罪の知覚を美の直感と同様に真面目に記録したのであった。心の汚れている者だけが、真実を恐れるのである。聖者は、悪徳を恐れず、それに立ち向かい、同情の目で見るだけである。このことを考慮した場合、ブラウニングをヴィクト

リア朝人として、レットルをはるのは困難なことである。彼はシェイクスピアと同様に誠実であった。恐らく慎重に言いのがれをして悪徳を重ねてきたために、生命が破滅の瀬戸際まで来ている者だけが、このような誠実さに対し十二分に価値を置くであろう。この様な者だけが、正当にこの心の純粹さを評価できるからである。

しかしながら、人生の詩人は、肉体と物質の面だけを強調するとはしない。この点が多く現代思想家の誤解しているところである。人生は肉体と同様に魂を含んでいる。例えば、『緑日のフィフィーネ』には、特にブラウニング流の美があふれている。

無力な私は花をつかむ、彼女の花の重みは

長く細い茎の頂上からのび出て、人目をひく、

彼女は振り返り、おののき、訴える

非難のかわりに彼女の感謝の思いを

誠心込めて受けるに足る人に向かつて、

(百合だけが知っていたのだ)、百合のような伸びが

無理に押えられ、

雪のように白い王冠状の花を、

それが彼女の顔、巻き付く棒からのぞかせている。

それから、深い形而上学的な思想と結びついている、ローラ・ナイトの絵画のように、生き生きとしたやり方で描いた美しい人生の色彩やかなペン画に加えて、これに似た多くの詩句がある。

あなたは 彼女のように汚れからスカートのみすそを引き寄せる
彼女は、仮に軽蔑されてまでも、老人や貧困や親の病気に仕える
ことになれば、
恐らく軽蔑などものともしないだろう。

いや、たぶん、身を汚して、
ふくらんだばかりの蕾の妹、バラの花についた露は、
代わってくだらない取り引きに加わるのをいやがるだろう。

——誰にわかるうか。

しかし、実際誰にわかるうか。私自身何もわからない、

ただあえて、彼女が急ぎ足でやって来て、

獲得したものを手渡してくれると想像するだけ……そうだ、

天幕の中の羊の群れの中に、彼はぼんやりと現れ、

はつきりと見分けられない、

人食い鬼、かせぐために多くの手足を持つ君主の中の君主、野獣

の顔をした破壊者、傷のあるこわい顔、敵意に満ちた顔立ち。

典型的にも、この詩には全てが含まれていて、闇から光、醜さから美しさ、つまらないことから深遠なことへと、それぞれ容易に広がっている。思想の発展のある時期に、この詩人は、夢にのみ関与しているとはのめかされていた。この考えは偽りであるが故に、自然と大きくふくらんでいった。この世は、誤った理論を育てる結構な促成栽培の温床である。『緑日のフィフィーネ』の中で、ブラウニングはこの考えを否定している。

詩人は決して夢を見ているのではない。

私たち退屈な族は、いつも夢を見ている。

私たちは、身体の組織をにぶらせ邪魔する、

目に見えない物について、さまざまな思いをいだくため、

正しい管をだめにしてしまふ。

いかなる幽霊を詩人は見るのか。いかなる悪魔を恐れるのか。

いかなる人間と物を誤解するのか。

詩人は、真実の写実主義者である。天職のために、詩人は写実主義者ではなく、実在を見るよりほかに仕方がないのである。そのために、彼らは、「目に見えないもの」を見る直感力が高度に発達しているのです、この仕事に向いているのである。この能力は、聖人の完全な洞察力に似ている。彼は、「人間の内にあるものを洞察し」、「人間の思想を理解した」、そのために世の最も偉大な写実主義者であったのである。なお、心理学で外向性として知られている型の者だけが、様々な事実と直面していき、人間が真に必要としているものを理解すると普通は考えられている。この理由は、ウィリアム・ジェイムズの定義による「意志強固な人」は、想像力が欠除しているために、天使が足を踏み入れるつもりのない場所へ向こう見ずに飛び込み、ただ強い性格と目に見えるもののほかには見えない強さから、困難な状況をうまく切り抜けていけるのである。困難な状況に立たされた場合、敏感な人は、見えたり見えなかつたりしている問題のあらゆる側面を見ることができると困惑し、ほとんど最初のうちに、活動できなくされてしまうのである。なぜかと言えば外

向性の人間は、自分にとって行動するのが容易である人生を、理解していないためである。彼は、人生を理解していないだけではない。彼には、理解すべきものが何かあることを、はっきり自覚できないのである。もちろんこれは彼の責任ではない。心理的な相違は、生理的なことと同様に、根本的に根深いものである。「意志強固な人」の影響は、すぐにも見られるが、一方、芸術家の影響は、いつでもすぐに明らかになるものではない。それはゆっくりと活動し、深く広範囲に及ぶものである。私がどこか他の箇所、情熱的な詩人にして改革者であるシェリー⁽¹⁾に、彼の主張する改革の採択に対して、直接責任があるとは言えないと述べたのはこのためである。影響は、間接的なものである。詩人の改革や改正の思想は、徐々に気づかされないように、人間の精神に浸み込んでいくのである。そしてついに、恐らく長い期間を経た後に、人を行動に駆り立てるのである。それはからしな種子であり、隠された力に満ちたパンの生地なのである。芸術家の達する結論は、最も険しい小道を経て達せられたものである。感情がいかに深く入り込んでいたとしても、あらゆる経験は、本質的に試みなのである。例えば、

彼の経験の失敗……それは彼の人生の失敗とは関係がない。なぜなら、人生の側面が、彼の魂に深く関与したことが、彼の人生理解につながったのである。そして、この理解のために、打ち負かされることは、勝利と同じ程興味深いものである。⁽²⁾

事実、失敗はより一層興味深いものであるかも知れない。つまり、

確かに失敗は、徹底的に考えることを要求する。成功は、考えないで、受け入れられてしまうところがある。ところが失敗の意味を反省しない訳にはいかないのである。いろいろ異なる形態を取る失敗の問題は、想像的な人に、一時の休息をも与えないことである。そして、失敗の意味を深く考えることが、最終的には、彼に力を与えるのである。ブラウニングは、特にくじけない失敗の詩人である。その為に、彼は偉大な詩人であると言うことが、自然と出てくるのである。彼は人生を常に戦いの場と見ていた。そこで魂は発展のために試され、時々苦しめられるのである。

自分の中に戦いが始まると

人間は何らかの価値が出てくる……

……

魂は目覚めて成長する。

この戦いを一生続けるのだ！

来世までも成長をやめないことだ！

彼が、常に「自分を見るのではなく、神が創造したものを大いに利用しよう」と努めているうちは、決して究極の失敗はしないのである。神は結果を重んじるのではなく、動機を重視されるのである。

長い人生の諸々の経験は——私たちは、ブラウニング程の能力のある詩人には、最も取るに足らない経験でさえも、意味があることを知っている——彼の燃えるような勇氣と信念をくじく力があると
言うよりもむしろ、それを高めてくれるのである。彼がかつて書い

た最後の言葉の中で、彼は「胸を張り、雲が切れることを決して疑わず」に行進する喜びと勝利を宣言し、「起きるために倒れ、よりよく戦うために迷う」と絶えず主張したのである。ブラウニングが七七歳の時に書き、彼が死んだ日に出版された、この『アソランド』の中には、別の詩人の最後の最も偉大な作品、つまりロバート・ブリッジズの『美の誓約』とある程度類似しているのが見られる。内容と手法に関して完全に異なっているけれども、二つとも全て虚しく、過去はむごいものであるとする観点に効果的に答えている、むしろ、肉体的な力が衰えるにつれて、精神的な力が増し、年月は詩人の力を衰えさせると言うよりはむしろ、それを深め豊かにすると暗示している。ブラウニングやブリッジズのような詩人たちは、時間についての常識を敵として拒絶するのである。つまり、時間とさえども、精神的な力が百倍にも豊かな形になっているために、彼らから取るうにも何も奪い取れないのである。

詩人の年は悲しい。なんのために？

若いころ、自然界は普段の姿を見せず

詩人の眼が異様に輝き——

己の魂の虹の弓で

すぐに包みこんだ。

今は花はただの花、

人、鳥、獣はただ獣、鳥、人——

ただそれ自体、それらは取り巻かれることはない

青春の日ははじめ、あたりに映え渡たり
天賦の色にそめられて。

これに対する答えは次の様になる。老齡の澄み切った理解力のために、神の創造物のむき出しの美しさが、おおいで曇らされずに現れてくる。ところがかすかに光るおおいで包み込む青春の情熱は、必然的にすべての光景の周辺に引き寄せられていく。確かに、老齡の落ちついた気分は、青春の激しい感情と中年の困惑が、かくしている多くのものを顕示してくれる。

ブラウニングは、肉体を賛美することもさげすむこともしなかった。彼の肉体は、すこぶる健全で、また真に宗教的な人の態度であった。とはいえ、彼は次のように問うたのである。

おまえの肉体がすこぶる健全なとき

いかに人の試練がお前の魂を孤独にさせるのか？

同じ詩の中で、彼は次のように主張している。

私たちはいつも言う訳ではない

「今日は肉の快楽をさけて

努力し励げみ 全体として進歩した！」

鳥が飛び歌うように

叫ぼう「善いものはすべて

私たちのもの、今は魂は肉体を助け

肉体は魂を助ける！」

肉体は、誘惑と戦い征服されるべき敵である。肉体それ自体は、おそらく大いに魂の発展を助けることはできないものである。それでもなお、それは激しい喜びを与え得るものである。

ああ、われら壯年の日の血氣盛んな力よ！

精神は疲れを知らず、筋肉も働きを止めず、

臆もゆるむことはない。

ああ、生きることの無上の悦び！

岩から岩へと飛びはね、もみの木の太枝を引き裂き、池の流れに飛び込み肌を冷たい銀の感触、熊狩り、ライオンが穴に横たわる焼きつく熱さ……

……

人生はただ生きるだけでどんなに素晴らしいものか！

常に歓喜にひたって、全心、全霊、感覚のすべてを用いることはいかによいことか！

これは、無上の肉体の満足である。同詩の中で、ダビデは次のように語る。

肉体をそれにふさわしい運命にまかせなさい！

魂をあなたのものとしなさい！

あなたにも老いが近づいてきたとき、魂によって、

初め意識しないで青春時代を楽しく過したよりもさらに多くを満喫できるだろう。

肉体に対するブラウニングの態度は、ヴィクトリア朝の人々とは反対のものであった。彼自らの強烈な生命力と活力は、主に「ただ生きていくだけでよい」という肉体の喜びから湧きでていた。彼の詩には、精神的な内容が見られるのに、そこには、大地から引き離されて、ある種の偉大な詩をだいなしにしている靈性のやせ細りは何も見られない。人間の生活は、ブラウニングにとって、精神のみの靈的な存在を上回るものであった。事実、彼は、地上でのこの種の生活が起り得たり、望まれたりすることを、激しく拒否したのであった。

筋肉は動いている時休んではないし、臆も離されてはいない。

おお、生きることの激しい歓喜……

彼を、ただでなくあらゆるかん木や花や人間の顔にも、神を見て取る真実の神秘主義にしたのは、この「強烈さ」つまり、とだえることのない興奮と喜びのこの感覚であった。彼の歓喜は、神を崇拜することであり、非常に生き生きと意義ある冒険を行なうことに影響を与えたのは、彼の神に対する幻であった。恐らく彼は、時には大変難しいものであるが、肉体と魂と精神の均衡を学ぶ必要はなかった。ある人々は、いとも容易に、同時に三つの世界に住み、人間の性質を構成している、あらゆる要素の価値を、正しく評価すること

ができるものである。このことは、困難がないと言う意味ではない。天才には、自からの個性に基づいて、大きな釣り合いを取るために、調整しなければならない葛藤と難しさがある。しかし彼は優れた統一の才能を有している。

シェリーは、この世を耐え忍ばなければならない煉獄と見ていた。彼個人の経験は、悲劇的にも、この信念を抱く自己を正当化したが、人間は究極的に完全になれるという信念を失なうことはなかったし、その理想に向かって努力することを止めなかった。しかし、彼に関するマシュー・アーノルドの大ざっぱな批評「光輝く翼を虚空で無駄にはばたかせる無力な天使」には、真理の一端がうかがえる。なぜなら、彼は自からを天使たちに準備されていない世界へ、完全に適合させることができなかった。この意味で、彼は神に見捨てられた世界の虚空で、激しく無益に自分の翼をはばたかせたのである。しかしながら、ブラウニングは、人生を冷徹な澄んだ目で眺めていた。彼は直接改革するのは、不可能なことを承知していた。そのため、彼は最終の結果については、むやみやたらに心配しないで、自からの人生の目的を果たし通した。彼は人生のとても早い時期に、次の点に気づいていた。普通ならば、かなり後になって現れてくる真実——つまり、芸術家には、果たさなければならぬ役割があり、それは受け入れざるを得ないものである。芸術家は、人間性を変革する目的を、あらかじめよく考え、主張することによって、自らの主義を押し進めてはならないのである。この種の意図は、常にそれ自体の目的に反するものであり、困惑した芸術家である改革者は、争乱で怪我をし血を流して退却するはめになることを知っていた。

人間性は、このように直接救われるのを拒ぶものである。それはむしろ、干渉を嫌うところがあり、そこで人間性を救う目的は、一層間接的な方法によってなされなければならないのである。ブラウニングのどの詩も、改革を意図して書かれているとは言えない。彼は書かなければならなかったから詩を書いたまでである。そのために、幸いなことにも何年間も詩人の成長をさまたげる家族の影響や環境との衝突を、時々回避することができた。青年時代に足を踏みはずして、自から困ったこともないし、私たちの知る限り、いかなる反対もなかったのである。彼の才能は、抑制されないで、発展したのである。彼は、あたかも子供はただ両親の写しであるかのように、息子は当然父親の職業をつぐべきであると主張するような両親に、阻止されることもなかった。事実、彼の初期の頃の人生は、周囲の状況や環境との衝突がみられることが、成功への最大の刺激であるとする一般の理論を論駁するものである。この種の理論の核心は、困難な苦悩の人生を目的達成の手段と考えずに、目的そのものとして賞揚してきた一層破壊的な形態を持つキリスト教信仰に、見られるように思われる。この種の信仰の影響は、遠くまで及んでいる。美は、官能性と深い関係がある。楽しいと言う感じは、決して善なるものではない。幸福な生活は、誤った生活であるにちがいない。そして義務に楽しい生活を嫌悪する要素がないならば、それは真実の義務ではない。喜びを外に表わすと、疑惑の目で見られる。このことは、次のように信じる追従者たちには、起こらないことである。神が求めているのは、「神の選ばれた人々を楽しませる」ためであり、私たちが要求されているのは、「常に主のなかにあって喜ぶ」

ことである。キリストの福音は、真の人生の福音であるために、特に喜びの福音なのである。イエスは、最も健全な心理学者であった。つまり、彼は内面から外面へと向かっていったのである。彼は罪と病いの根源の所在を知っていたし、この二つの深い類似性にも気付いていた。また完全な人生は、必然的に喜びの人生であることもわかっていった。

わたしがこれらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにも宿るため、また、あなたがたの喜びが満ちあふれるためである。……

あなたがたの喜びが満ちあふれるであらう。

この喜びは、神のみ恵みの深いこと、つまり、普通正當なものであるかのように、決められている「幸福」とははるかに隔たった状態の意に介されている。誠意あるキリスト教徒は、誰も自ら奪い取ることのできない外面的な事柄とは別な喜びを、見出ししていることは確かに本當のことである。しかし、彼は「幸福」について考えることをやめてしまっている。パウロとサイラスが、牢獄にぶち込まれた時、二人に神への賛歌を歌わせたのは、まさにこのキリスト教の喜びであったのである。さらにこのことのために、パウロは次のように言わざるをえなかった。

今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く。あの都で、ど

んなことがわたしの身にふりかかって来るか、わたしにはわからない。ただ、精霊が至るところの町々で、わたしにはっきり告げているのは、投獄と患難とが、わたしを待ちうけているということだ。しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を、果たし得さえしたら、こののちは自分にとって、少しも惜しいとは思わない。

ブラウニングとパウロには、ある類似性が見られる。二人とも、本質的に強壯で健全な幻想家であつたし、いつでもキリスト教生活から生まれる喜びを主張したのである。二人とも、自制、禁欲、喜びの否定的な面に対して、極端に関心を抱いておらず、むしろ苦悩の創造的な本質、目的達成の手段として、喜んで耐え忍ぶ悲しみの中に見いだされる喜びを強調するものであつた。二人とも、常に苦しみを、それ自体目的としてではなく、喜びへ至る働きと見ていた。これは、いわばキリストの復活の福音である。もしブラウニングが、精神的な建築家のかわりに物質的な建築家であつたならば、彼は復活したキリストの教会を建てたであろうし、彼が画家だったら、カルドリーの光景よりもむしろ復活祭の当日やその後の様子を喜んで描いたことであろう。

ブラウニングを名譽ある失敗の詩人にしたのは、精神的な価値を最高のものと信じていたためである。人生を近視眼的に眺めるために、一瞬自己を見失うことを暗示する箇所は、彼の作品のどこにも見られない。現在の悪は、常に未来の善でなければならぬ。真実が雲でおおわれても、ほんの一時であり、時はその意味と苦しみの

結果得られる喜びを顯示するのである。

私たちが欲し 望み 夢見る善はすべて存在するだろう

善のまやかしではなく、善そのもの、一度声になって発せられた

美も善も力も演奏家のために存続しないものはない、

神が一瞬のうちに構想をよしと認める時に。

あまりに高貴すぎるもの、あまりに壮大すぎるもの、

大地を去り 大空に消える感情は、

恋人や詩人によって 神へささげられた音楽である。

一度でも神が聞いてくださればそれで充分である。

私たちは、その音楽をすぐに聞くことになる。

「アプト・ヴォウグラ」のこの連の中に、ブラウニングは、見たところ気楽な生活をしていたので、挫折や失敗について何も知り得なかつたと想像する人々に対しての答えが見られる。彼自身が体験していない時に、樂觀的な詩を書き、失敗のつらさとその本当の意味をいともすらすらと書いたと人が主張するのは、少しも不思議なことではない。その答えは次の一行にみられる。

あまりに高貴すぎるもの あまりに壮大すぎるもの

ブラウニングは、精神の巨人であつたために、当然の結果として、彼が真実なものとみなした成功と失敗は、精神的な価値の領域にだけ存在し、大きな釣り合いを必要としたのであつた。彼にとってあ

らゆることが、「大地にとつては、あまりに壮大すぎるものであった。」彼が書いたすべての詩句は、このことをおのずと証明している。明らかに、気楽で悩みのない人であり、社会生活においてまったく安楽に過ごし、後年顕著な社会的成功を治めた彼は、この表面的な地上の生活において、本当の生活をまったくしていなかった。なぜなら、彼にとつてそれは究極の価値ではなかったからである。彼には、偉大な数学者が、初歩のたし算をするのと同様に簡単なものであった。日々のこの平凡な生活は、ブラウニングのような能力をもった人間からは、ほとんど何も要求しなかった。彼は子供の中の大人であり、小人の中のガリバーだった。精神的発達がときどき青年期に止まってしまった大人と呼べる人々の中に住むのに何の努力も必要なかったのである。完全に精神的に靈的に成熟する人間の割合は、驚くほど少ないのである。そのために私たちの墮落した世界のあらゆる悲劇が生ずるのである。(つづく)